

英語の実践的コミュニケーション能力を 育成するための指導方法に関する研究

- 話す意欲を高める活動を通して -

佐賀県立多久高等学校 教諭 山口 義民

要 旨

本研究においては、英語の実践的コミュニケーション能力を育成するために、話す意欲を高める研究を進めた。コミュニケーション活動に必要な場面を設定し、生徒と教師のインタラクションによる語彙や表現の習得、モデル・スキットを使った場面特有の表現の習得を経て、ペア活動による自己表現力を高める活動などを行った。また、単元の学習内容と到達目標を示して目的意識をもたせ、個人の到達度を確認しながら授業を進めた。その結果、生徒は、英語によるインタラクションに意欲的に取り組むようになり、ペア活動による自己表現活動では情報の質・量ともに豊かになるなど、自己表現力の向上に関する指導方法が有効であった。

<キーワード> 実践的コミュニケーション能力 インタラクション 語彙や表現の定着
自己表現力 学習内容と到達目標

1 主題設定の理由

高等学校では平成15年度より実施される学習指導要領において外国語科が必修になった。外国語を通じて言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や相手の意向などを理解したり自分の考えなどを表現したりする実践的コミュニケーション能力を養うことが求められている。これまで、コミュニケーション能力の重要性について強調されてきたが、今回、「実践的」というキーワードが登場し、英語を使用する場面を配慮した指導の充実を図ることが求められている。しかし、本校情報科2年の生徒は、語彙力・表現力不足や英語に対する苦手意識などから、うまくコミュニケーションができない生徒も少なくない。教室で学んだ英語を、実際の場面で役立つようにする必要がある。そこで、本研究において、言語使用場面に応じた語彙や表現の習得から自己表現力を高めるまでの指導方法を工夫することにより、実践的コミュニケーション能力の育成を目指すことにし、本主題を設定した。

2 研究の目標

英語の科目「オーラル・コミュニケーションB」において、実践的コミュニケーション能力を身に付けさせるための効果的な指導方法を探る。

3 研究の仮説

コミュニケーション活動の場で、次のような手立てを取れば、生徒は意欲的にコミュニケーションを図ろうとし、実践的コミュニケーション能力を身に付けるであろう。

語彙や表現の学習にオーラル・インタラクションを取り入れる。

グループやペアによる活動を通して、モデル・スキットを習得させる。

設定した場面で自己表現活動を行わせる。

単元ごとに学習内容とその到達目標を意識させ、自己評価を通して到達度を確認させる。

4 研究の内容と方法

(1) 研究の内容

- ア 実践的コミュニケーション能力及び活動に関する理論研究と先行研究・実践例の調査
- イ 生徒の実態把握と検証授業の指導方法と計画の作成
- ウ 検証授業(第2学年)を通じた研究の仮説の検証

(2) 研究の方法

- ア 英語に対する生徒の意識調査や学習到達度の測定を行い、その結果を分析する。
- イ 仮説検証のための授業実践及びその分析と考察を行い、成果と今後の課題を明らかにする。

5 研究の実際

(1) 事前調査による考察

事前調査として、検証の対象となるクラスに「意識調査」と「コミュニケーション能力テスト」を実施した。まず、生徒の意識面については、表1に示すように、約80%の生徒が英語に対して苦手意識をもち、中学時代からその意識が続いている。普段の授業を観察しても、単語の発音練習などにおいて、声が小さい。図1の調査結果より、苦手と感じた理由は文法の理解や単語などの知識面にあることが分かった。この苦手意識をなくし、生徒に興味をもたせ、英語を通して意思疎通をする喜びを味わわせたいと考えた。

生徒の学習到達度を見るために、「英語コミュニケーション能力に関する調査票」(佐賀県教育センター)を使用し、平成12年度に実施された同調査と本校分を比較した。(表2参照) その結果、大問4「与えられた状況に応じて自分の考えを相手に正しく伝える問題」には積極的に解答していたが、大問3「読み取った状況に応じた受け答えをする問題」や大問5「自分の考えをまとめて書く問題」には消極的で、38%の生徒は無解答であった。手立てのヒントとして、大問4の結果から、設定された場面に関する語彙や表現を習得すれば、英語でコミュニケーション活動を行うことができるのではないかと考えた。このことは検証授業の手立ての一つになりうると考える。

表1 意識調査の結果のまとめ

中学時代に約70%、高校時代は80%の生徒が英語に対して苦手意識をもっている。
文法や語彙などの授業を理解できていない。
語彙力不足が原因で、話す活動を嫌がっている生徒が多い。
性格的に「積極的に話す方ではない」など、話すことへの心理的な抵抗が大きい生徒もいる。

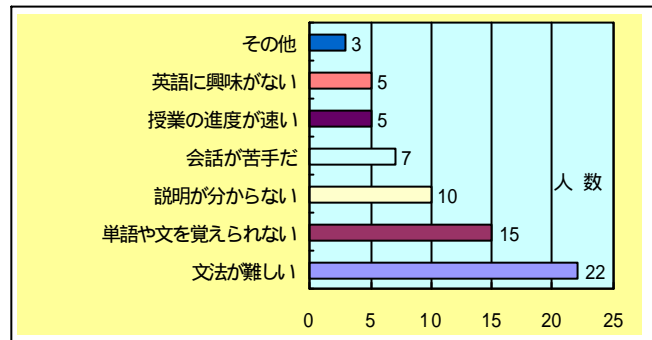


図1 英語が不得意になった理由

表2 「英語コミュニケーション能力に関する調査票」の得点率と教育センター実施分との比較

	大問1	大問2	大問3	大問4	大問5	合計
平均得点率(教育センター)	40.7	45.6	57.2	51.7	60.9	50.9
C群の平均得点率(教育センター)	25.0	19.4	21.7	16.7	45.5	23.9
平均得点率(本校情報科)	29.8	13.6	8.8	20.8	24.6	20.7
本校とC群(センター)との差	+ 4.8	- 5.8	- 12.9	+ 4.1	- 20.9	- 3.2

A群：150名(得点率65%以上)、B群：150名(得点率38%～64%)、C群：143名(得点率37%以下)

意識調査のアンケートや能力テストによるデータや授業における観察などから、本研究の方向性を検討した。

(2) 研究の仮説に関する具体的な手立ての決定

事前調査の結果などから、研究の仮説を基に、次頁表3のように手立てについて具体的にまとめた。

表3 研究の具体的な手立てと配慮事項

ア	<p>インタラクションの工夫</p> <p>語彙や表現を習得させるために、単元導入時に歌やゲーム、簡単な英語でのインタラクションを行わせ、興味・関心を喚起する。(実施するに当たり、班対抗で点数を競わせるなど、意欲付けに配慮する)</p>
イ	<p>グループやペアによるスキットの習得</p> <p>ペアの作り方に配慮することで、ペア活動をより活発にする。生徒の発言回数を増やし、活動へ主体的に参加するようにする。また、互いに協力し合うことで、アイデアを出し合うなどの相乗効果をねらう。</p>
ウ	<p>設定された場面における自己表現活動</p> <p>教師は、モデル・スキットを示し、作成への手順を示す。基本的にペア活動の形態を取り、対話文の一部又は全体を完成するように指示する。語彙や表現について生徒の質問には答えるが、スキットの作成後、生徒自身が達成感を味わえるように、語彙や表現の仕方のみを答えるように配慮する。</p>
エ	<p>学習内容と到達目標の提示</p> <p>生徒に学習内容とその到達目標を示し、授業中の集中度を高め、生徒に達成感を与える。到達者・未到達者に対する指導方法を工夫し、すべての生徒に満足感を与えられるように配慮する。</p>
オ	<p>自己評価表による関心・態度・理解度のチェック</p> <p>単元の終了時に、自己の授業への関心や態度・理解度を質問紙により、客観的に振り返らせる。統計の取り方について、生徒一人一人に視点を置き、生徒の態度や関心の変化を見て個人指導の材料に役立てる。また、学習内容に関する反省項目を用意し、全生徒のデータを集計し、教師の指導方法の改善にも役立てる。</p>

(3) 本研究における学習指導形態の具体化

「実践的コミュニケーション活動へ向けての指導」の構想を作成し、図2に示すように各単元における生徒の活動と教師の手立てを取ることにした。

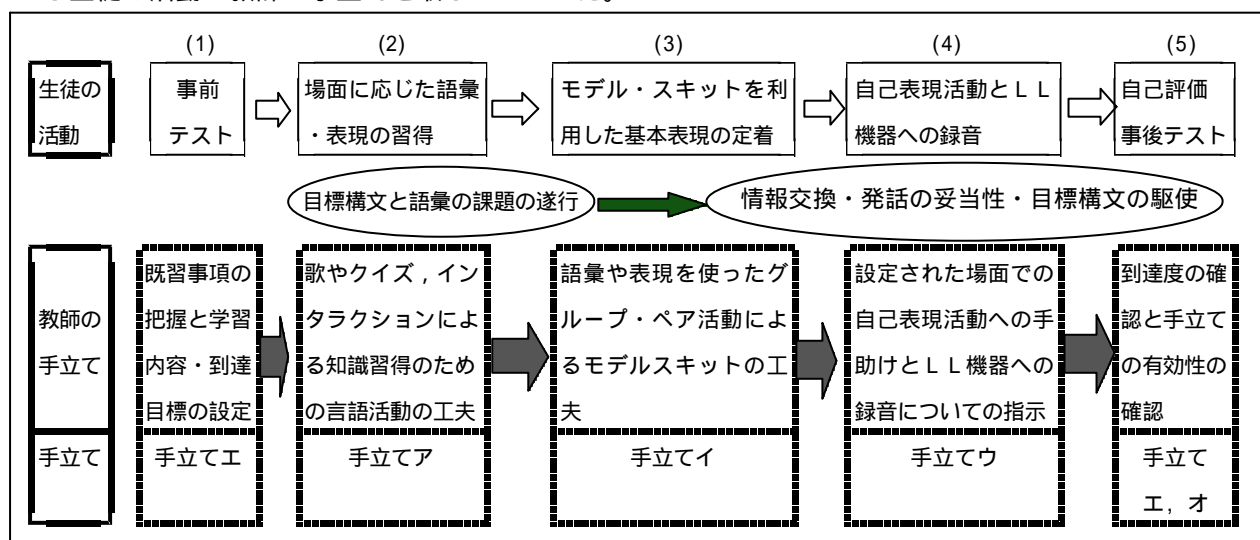


図2 実践的コミュニケーション活動へ向けての指導

(4) 検証授業のスケジュール

全体で4つの単元について検証授業を行った。単元の内容や難易度と生徒の興味・関心や英語力などを考慮して、1つの単元を1～3時間の範囲で設定した。次頁表4に示すように、それぞれの単元について「学習内容と到達目標の設定」、「語彙の習得に関するインタラクションの決定」、「ペア・ワーク時のモデル・スキットの作成」、「自己表現力を引き出すようなワークシートの作成」の手順で準備を進めた。また、学習指導案の中に、各活動内容を観察して記録する欄を設けて、後で活動を振り返るようにした。

表4 検証授業のスケジュール

日時	単元・到達目標	主な学習内容
12/10 2時間	【単元1: Ted Has a Health Problem】 ・体の部分の名前を書ける ・医者への質問を聞き、病状を伝えられる ・ペアでスキットを作ることができる	・インタラクションによる病気に関する語彙や表現の定着 ・病院でのスキットの作成とペア・ワークによる言語活動 ・医者・患者のスキット作成
12/13 2時間	【単元2: Free Time】 ・余暇に関する表現を書ける ・自分の余暇の過ごし方を言える ・ペアでスキットを作ることができる	・余暇の過ごし方に関して、インタラクションによる語彙や表現の定着 ・自分の情報を引き出すような自由度の高い表現を目指す活動と発表
12/17 1時間	【単元3: The Dog and the Carpet】 ・4枚の絵の内容を英語で言える ・絵を見て話のあらすじが分かる ・絵を見て自由な発想で表現できる	・絵を使った物語の展開を意識した活動 ・絵の内容に関する質問への応答 ・最後の絵の内容を見て、自分で感じた英文の作成
1/10 1/14 1/17 3時間	【単元4: On the Telephone】 ・電話で使う表現を書ける ・モデル・スキットを使ったロール・プレイができる ・ペアでスキットを作ることができる	・電話のやり取りに必要な語彙や基本表現の定着 ・モデル・スキットのロール・プレイ練習及び条件に応じたスキットの作成 ・設定した電話での場面のスキットの作成及び発表

(5) 検証授業の手立ての考察

ア インタラクションの工夫

単元1 (歌と体操), 単元2 (自己紹介ゲーム), 単元3 (クリス・クロスゲーム), 単元4 (LL機器の利用)

単元2では、趣味や余暇に関する活動に慣れてきて表現を覚えるのが速くなった。表5に示すように、ゲーム形式にしたことで、必ず何か言うようにしたことがよかったと言える。自己評価では、85%の生徒が理解できたと答えており、興味・関心が高まったと考えられる。

表5 自己紹介ゲームの例 (単元2)

<p>クラスのある横の1列を起立させる。一番左の生徒から自分の名前と趣味や暇なときにすることを1つ言う。次の生徒は前の生徒の名前と、更に趣味を言ってから自分の名前と趣味を言う。また、次の生徒は最初の人から順に言っていく。1回目は全体で一斉に練習し、次は、1列だけ選び、その列で発表をさせる。</p>	<p>S 1 : I'm Hiroshi. I like fishing. S 2 : He's Hiroshi. He likes fishing. And I'm Chihiro. I like shopping. S 3 : He's Hiroshi. He likes fishing. And she's Chihiro. She likes shopping. And I'm Makoto. I like reading books.</p>
---	--

イ グループやペアによるスキットの習得

単元1 (カードを使ったゲーム), 単元2 (インターネット資料を使ったペア・ワーク), 単元4 (ペアによる段階別表現テスト)

単元1では、ターゲット文の定着をねらって、次頁表6に示すように、ゲーム感覚で2文を完全にマスターさせることをねらいにした。発音した回数は、最初の発音練習から数えると、20回以上行ったことになった。ゲームでは、発話の際に意味が伴っているため、理解しやすかったようである。また、グループごとに点数を集計し競わせたので、生徒は活発に活動していた。よって、苦手とするスキットの習得も、ゲームを利用したり、競争させたことで、意欲が高まったと考えられる。

表6 カードを使ったゲームの例(単元1)

<p>クラス内を自由に動いて、ペアを見付け、どちらか一方が定型の疑問文を使って相手の症状を尋ねて、症状をカードにチェックしていく。また、もう一方の生徒も同じ要領で行う。5人チェックが終わった者から着席する。次に、1回目と同じ質問をして、自分の風邪の症状と同じ生徒を3人探したら着席する。</p>	<p>尋ね方: What seems to be the problem? 答え方: I have (a feverなど).</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse; text-align: center;"> <thead> <tr> <th style="width: 30%;"></th> <th style="width: 15%;">君の症状</th> <th style="width: 15%;">1人目</th> <th style="width: 15%;">2人目</th> <th style="width: 15%;"></th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>a fever</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>a runny nose</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>a sore throat</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>a headache</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </tbody> </table>		君の症状	1人目	2人目		a fever					a runny nose					a sore throat					a headache				
	君の症状	1人目	2人目																							
a fever																										
a runny nose																										
a sore throat																										
a headache																										

ウ 設定された場面における自己表現活動

単元1 (空欄2箇所の関係を意識した活動), 単元2 (結論を言った後, 具体的内容や理由の提示を意識した活動), 単元3 (4枚の絵を使い, 全体を意識した活動), 単元4 (電話で相手を説得したり, 依頼する活動)

単元4は、条件付きの英作文で生徒が苦手としていることであったが、自分の考えを表現しようとする姿勢が見られた。活動中の質問も多く、答えきれない程であった。検証授業も4つ目の単元ということもあって生徒は慣れてきており、条件付きよりも自分で場面を設定して全体を作りたいという生徒も出てきた。他の単元においても、ワークシートの作成とLL機器の録音を課題とした。ワークシートは対話の内容や発想、文の数によって表7のように5段階に基準を設け点数化した。LL機器への録音は、自分の声を変えている生徒もいて、楽しんで活動をしていた。生徒はこの録音にも慣れてきて、図3に示すように、約9割の生徒が、質・量ともに評価3以上を取った。よって、各単元における手立てが、自己表現活動に有効であったと考えられる。

表7 自己表現活動の評価基準

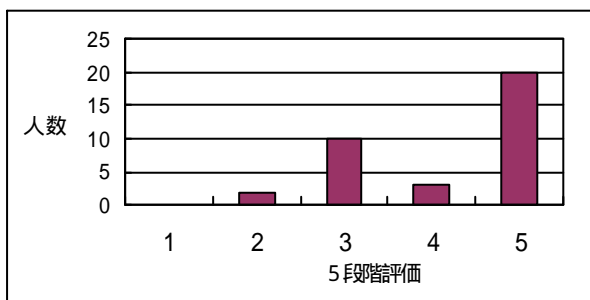


図3 条件英作文の評価結果(単元4)

5: 独自性や展開がかなり良い。文の長さは10文以上。
 4: 独自性が見られ、展開は良い。7~9文。
 3: 独自性が少し見られ、展開は普通。4~6文。
 2: 独自性がほとんど見られない。展開は良くない。2~3文。
 1: 白紙やモデルの丸写し。

エ 学習内容と到達目標の提示

前頁表4に挙げているように、学習内容とその到達目標を設定し、達成基準をBランク(約7~8割)にし、前もって生徒に提示した。単元4の目標提示に関する自己評価結果では、図

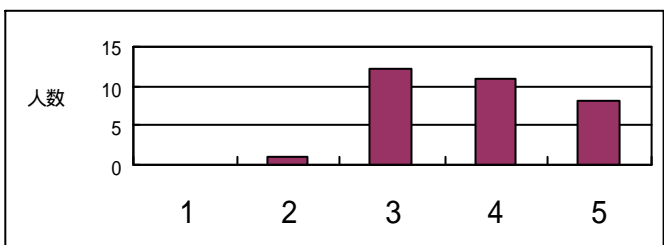


図4 到達目標の提示の有効性(単元4自己評価)

4に示すように、ほとんど全員が評価3以上を付けていた。さらに、4つの単元の自己評価の総平均点が3.8点と高かった。よって、この手立てが有効であったと考えられる。

オ 自己評価による関心・態度・理解度のチェック

生徒たちは、自ら表の記入を要求するなど、次第に自己評価表の記入に慣れてきた。定期的な実施したことで、事後テストや自己評価を意識しているため、授業の学習活動において、自分自身に良い評価を与えようとする気持ちが働いてきていたものと考えられる。

(6) 検証授業の全体考察

ア 事前・事後における語彙力の変化

各単元を学習する前と後に、単語力と表現力を調査するテストを行った結果、どの単元を取っても事後のテストでかなり伸びている。単元4でも、事後のテストでは、クラスの平均点が満点に近付いた。(図5参照)

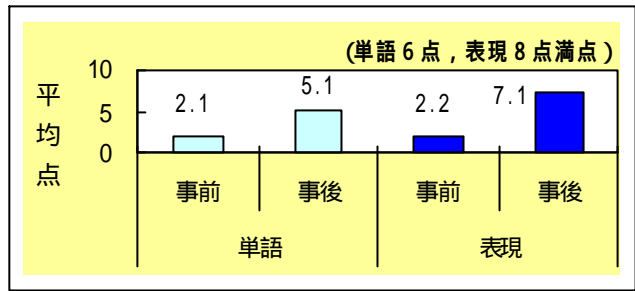


図5 語彙力の変化(単元4)

イ 自己表現活動の考察

各単元の後半で行った自己表現活動の評価を、作品の「内容(自由な発想・展開)」と「文の数」を基準に行った。「内容」では、単元4の課題が、やや難しかったにもかかわらず、発想や展開などの工夫の跡が随所に見られた。

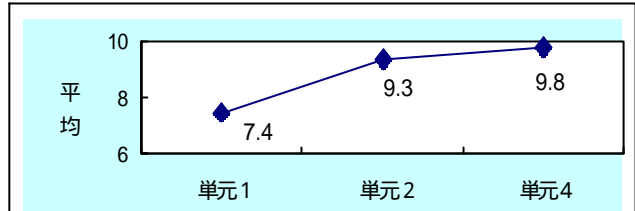


図6 自由英作文(文の数)

また、図6のように、「文の数」においては、順調に伸びていた。

ウ 実態調査(事後)における考察

検証授業後の「意識調査」では、97%の生徒が「学習内容と到達目標の提示が学習に役立った」と答えていた。そして、検証授業で多く採り入れたペア活動には「普通に活動した」と「活発に活動した」を合わせると、90%以上になり、ペア活動が、言語活動に有効であったと考えられる。ペア活動によるスキット制作では、80%近くが「うまくできた」と回答している点から、ペア活動のスキット作成が有効であったと言える。さらに、前述の「英語コミュニケーション能力に関する調査票」の「条件及び自由英作文」の問題を検証授業後にも解かせたところ、苦手としていた問題にも、今回は意欲的に取り組んでいて、無解答は一人もいなかった。(図7参照) 事前テストの得点を基に3グループに分け、事後テストと比較した結果、各グループで大きな伸びを見ることができた。(図8参照)

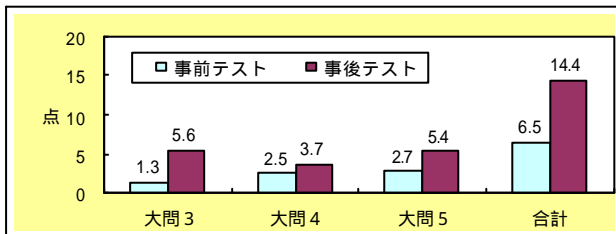


図7 コミュニケーションの能力テストの変化

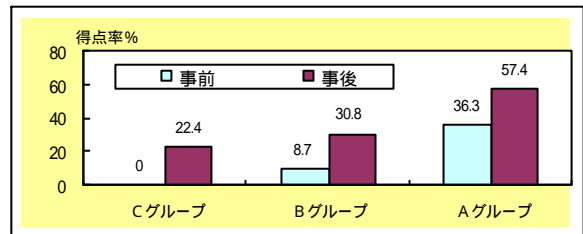


図8 平均得点率の推移(グループ別)

6 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

実践的コミュニケーション能力を育成するための指導の中で、「話すこと」を中心に、研究を進めた。「語彙や表現を習得するための指導方法の工夫」や「自己表現力養成のための手立て」などは、準備にかなりの時間を要したが、思った以上の成果があったと考える。

(2) 今後の課題

今回の研究で、日ごろから問題意識をもち、その解決への手立てを考える必要性を実感した。今後、この実践的コミュニケーション能力の育成が、教室外の実際の場面でも役立つように、更に研究を進めていきたい。生徒の目が次第に輝いてきて、英語に対する関心が少しずつ高まってきたのを実感した。今回の「意欲の高まり」を「実践的コミュニケーション能力の深まり」へと発展させていきたい。

《参考文献》

- ・ 高橋 正夫著 『実践的コミュニケーションの指導』 2001年 大修館書店